

▼パラリンピックに学ぶ▼

校長 阿南 孝也

リオオリンピックに引き続きパラリンピックが開催され、障がい乗り越えて全力で競技する選手の姿は、世界中に感銘を与えました。

パラリンピックの名称は、“paraplegia”（両下肢のまひ）＋“olympic”（オリンピック）の合成語として生まれました。しかし当初の車椅子競技に加えて、視覚障がいや脳性まひなど、様々な障がいを持つ人が参加できる大会へと発展したために、「もう一つのオリンピック」という意味の“parallel”（平行）＋“olympic”と解釈することになったのです。1988年のソウルオリンピック以後、オリンピックに引き続き同じ場所で開催されることになりました。

健常者の場合、運動によって体内に熱がたまり、自律神経が働いて、発汗作用によって体温を一定に保つよう調整されます。ところが脊髄などに損傷を負った人は、まひしている部分の皮膚に汗が出ないために、体温調節が難しいのだそうです。

成田真由美さん（46歳）は4大会にわたりパラリンピックに出場し、15個の金メダルを獲得して「水の女王」と呼ばれた水泳競技の第一人者でした。北京大会後引退し、講演などを通して、障がい者スポーツの周知活動を続けてこられました。7年ぶりに現役復帰し、今回50m自由形で派遣標準記録を突破して2大会ぶりにリオ出場を勝ち取ったのです。

成田さんは脊髄炎のために、13歳で両下肢まひとなりました。23歳のときに、障がい者水泳大会のリレーメンバーが足りないからと誘われたことが、彼女の人生を大きく変えることになったのです。彼女は上半身だけを使って泳ぎます。運動により体温が上昇しますが、全身が熱くなってようやく熱いと感じるのです。そのため練習時間は1時間以内と決めているのだそうです。冷水で全身を冷やしながら、残された機能をフルに使って戦えるように、練習に工夫を凝らしているのです。

人生思い通りに行かないことが多々あるものです。思わぬトラブルに巻き込まれたり、高い壁に行く手を阻まれて、力のなさを痛感させられることもあるかもしれません。「失ったものを数えるのではなく、得たものを数えていく人間になりたい」。成田さんのこの言葉に学びたいと思います。

この秋、洛星の生徒たちは、文化祭、体育祭を通して、一生の宝となる大きな財産を得ることができました。まもなく前期末考査が始まります。辛いことから逃げることなく、全力を出してよい準備をしてください。

洛星で学ぶ皆さんが、日々の学びを通して、頭を鍛え、心を磨き、体を育み、困難に負けることなく、人々に愛を持って接することのできる心と力が備わった青年として成長してくれることを願っています。